知識の花弁

三田メディアセンターだより

No.4
2014秋

年表でみる
メディアセンターにある宝物

知って良かった ツール＆サービス
“国立国会図書館デジタル化資料”の利用

コレクションの広場
井筒文庫

図書館の舞台ウラ
購入希望

貴重書紹介
『浦島太郎』

スタッフレポート
出島の国での日本との出会い

主な出来事（2014.4-2014.9）

慶應義塾図書館

年表でみる メディアセンターにある宝物

三田メディアセンターには国指定重要文化財5件(★)をはじめ貴重な資料約1万点を収蔵した貴重書室があります。慶應義塾では創立当初から優れた西洋の知識を積極的に取り入れるため、洋書の古典収集を進めてきました。その後は研究の広がりとともに和漢書善本の充実にも力を注ぎ、今日では和漢洋でバランスのとれたコレクションとなっています。今回はこれらの中から特色ある資料を、その時代を鳥瞰できる形で紹介します。なお三田メディアセンターでは、これらの資料を館内、学外で開催する展示会や図書館ウェブサイトで公開するとともに文化の継承にも努めています。

源頼朝善光寺参詣随兵日記　建久8年（1197）

A 相良家文書★

肥後人吉藩主相良家に伝来した古文書・古記録約1,400点です。相良家は鎌倉時代から明治維新まで約700年にわたって肥後国球磨郡一帯を領した武家です。同じ地にこれほど長く家が続くことは日本史上珍しく、本文書はその歴史を具体的に伝えるものです。

B 後鳥羽院御抄并越部禅尼消息★

鎌倉末期〜南北朝時代の歌壇の第一人者である頓阿（1289-1372）が、「御鳥羽院御抄」と「越部禅尼消息」を書写させて自筆の奥書をつけたものです。鎌倉時代の代表的な歌学書の最も古い写本として中世文学史上重要な資料です。

魚菜文庫（鎌倉後期〜昭和）　田村魚菜旧蔵の料理関係資料

相良家文書（鎌倉〜明治）　A

ギリシア語個人書簡（パピルス）（2世紀中頃）

源氏物語成立（11世紀初め）　展示会情報

B.C.1000　1197　1351　1450　1455　1500

B　C

中国殷代の甲骨文字資料（B.C.1100）

エジプト象形文字による死者の書（木製）（B.C.600頃）

百万塔陀羅尼（770）

反町文書（鎌倉中期〜江戸中期）　反町十郎旧蔵の武家文書

聖書・ミサ典礼書写本零葉（11〜14世紀）

インキュナブラコレクション（14〜15世紀）　D

古写経（平安〜室町）　古い時代に書写された仏教経典

ダンテ『神曲』

C グーテンベルク42行聖書

活版印刷術の発明者、ヨハン・グーテンベルク（1397?-1468）が印刷した世界初の聖書です。ほとんどのページが42行の行組みであることから「42行聖書」とも呼ばれています。180部前後印刷されたと推測されていますが、現存するものは48部のみで、慶應はアジアで唯一の所蔵館です。

D インキュナブラコレクション

インキュナブラ（incunabula）は、ラテン語の「cunabula」（ゆりかご）から派生した「出生地」「初め」を意味する言葉で、1500年末までにヨーロッパで刊行された活版印刷物の総称です。現存数が少ない貴重資料で、慶應では国内有数の40点以上を所蔵しています。

『酒呑童子』江戸前期写　絵巻

E 奈良絵本コレクション

奈良絵本は室町時代末期から江戸時代前期にかけて作られた写本で、挿絵に朱、緑など鮮やかな色彩と金銀箔・泥がほどこされています。内容は御伽草子が中心です。慶應では『文正草子』、『酒呑童子』など絵巻を含めた奈良絵本50点あまりを所蔵しています。

F 博物誌・百科全書コレクション

博物学とは自然界の事物や現象を総合的・系統的に記述する学問で、啓蒙思想にも影響を与えました。関連する図版集が多く刊行されたのも特徴です。『百科全書』パリ初版や、17～18世紀ヨーロッパの辞典・百科事典に加え、塾員の荒俣宏氏から譲られた博物誌資料から成っています。

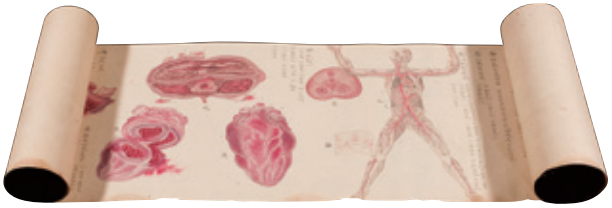
ゲスナー『動物誌』ドイツ語訳　1606年刊

G 大かうさまくんきのうち★
（『太閤様軍記の中』）

信長・秀吉に仕えた太田和泉守牛一（1527-1613）がその著作「太閤軍記」から一部を抜粋して書写した原装の著者自筆本です。慶長15（1610）年前後の成立と推測され、数多い太閤軍記の中の現存最古本となっています。

H 解剖存真図★

淀藩の藩医をつとめた南小柿寧一（1785?-1825）が制作した彩色の人体解剖図集です。40体以上の解剖に参加した実見の成果と西洋解剖学の知識に基づく実証的な解剖図であることから、19世紀前半に日本人によって描かれた解剖図の最高峰とされています。



【左】歌川国貞「豊国漫画図絵　弁天小僧菊之介」
【右】葛飾北斎「冨嶽三十六景　神奈川沖浪裏」

J 対馬宗家文書★

江戸時代、朝鮮国との外交・貿易を独占的に担った対馬宗家において作成された古文書・古記録約1,500点です。朝鮮通信使来聘の計画段階から帰国までの様子を詳しく伝える朝鮮通信使記録など895点が「対馬宗家関係資料」として重要文化財に指定されています。

朝鮮通信使記録

I 高橋誠一郎浮世絵コレクション

経済学部教授であった高橋誠一郎氏（1884-1982）が収集した約1,500点のコレクションです。浮世絵の開祖・菱川師宣をはじめ、喜多川歌麿・葛飾北斎らの作品から明治の月岡芳年までを網羅しています。江戸初期から後期、明治にいたる浮世絵の歴史を通覧できるように体系的に収集されています。

展示会情報

第26回　慶應義塾図書館貴重書展示会
「慶應義塾の王朝物語：源氏物語を中心として」

主催：慶應義塾図書館　　協賛：丸善株式会社
会期：2014年10月22日（水）～28日（火）9：30～20：30（※最終日は17時閉場）
会場：丸善・日本橋店3階ギャラリー　入場無料
ギャラリートーク：佐々木孝浩　慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授
10月25日（土）、26日（日）14：00～15：00

知って良かった　ツール＆サービス

“国立国会図書館デジタル化資料”の利用

電子ブックや電子ジャーナル、新聞記事の配信など、電子媒体での出版が盛んになり、パソコンや携帯機器の画面で“本を読む”ということがあまり特別なことではなくなってきました。一般的な図書館では、収集した資料の“保存”と“利用”、両方の目的を実現する手段として、既に紙媒体で出版された資料のデジタル化が進められています。

国立国会図書館は、「納本制度」に基づき、戦後に国内で刊行された出版物を網羅的に収集・保存しています。さらに前身の帝国図書館などから引き継いだ貴重書や明治期・大正期刊行図書など数多くの貴重な資料を所蔵していますが、これらの貴重な資料を収集するだけでなく、後世に残すことを使命のひとつとしています。著作権法上の特例が認められている国立国会図書館では、15年以上前から所蔵資料のデジタル化を進めています。原資料の代わりにデジタル化資料を利用に供することで、原資料をより良い状態のまま保存することができるのです。2014年1月現在、228万点もの資料がデジタル化されています。

国立国会図書館デジタルコレクション　http://dl.ndl.go.jp/

国立国会図書館のウェブサイトでは、図書、雑誌のほかにも、古典籍、博士論文、憲政資料など様々なデジタル資料の所蔵を検索することができます。

国立国会図書館がデジタル化した資料には、利用条件によって「インターネット公開」「国立国会図書館内限定」「図書館送信限定」の3種類があり、検索結果にそれが表示されます。

「インターネット公開」・・・・・・・著作権処理が済んでいる資料で、インターネット上で自由に閲覧できます。2014年1月現在、47万点にもおよび、「近代デジタルライブラリー」からも利用できます。

「国立国会図書館内限定」・・・・著作権処理が済んでおらず、一般に入手が可能とされる資料は、国立国会図書館の館内のみで利用できます。

「図書館送信限定」・・・・・・・・・・「図書館向けデジタル化資料送信サービス」として、参加承認を受けた図書館の端末を利用してデジタル資料を閲覧することができます。従来、著作権処理が済んでいない資料は、国立国会図書館館内の端末でしか利用できませんでしたが、今年から、参加承認を受けた図書館の端末からも利用できるようになりました。一般に入手することが困難な絶版資料等に限定され、130万点以上の資料が閲覧可能です。

三田メディアセンターで、この「図書館向けデジタル化資料送信サービス」を利用できるのは、

- 現在慶應に在籍し、図書の貸出サービスを受けられる方です。
- 三田メディアセンター館内の端末を使用するためにITCアカウント（キャンパスに設置されたパソコンを使用するためのアカウント）が必要です。
- 図書館のスタッフが立ち会って代行ログインするため、レファレンスカウンターのサービス時間内の利用となります。
（授業期間中：平日の18時30分まで、休業期間は17時まで。土日は利用できません。）

ログインしたら、「国立国会図書館デジタルコレクション」のサイトで資料を検索。検索結果からタイトルをクリックすると、デジタル画像を表示できます。「NDL-OPAC」からも「デジタル化資料」のボタンがあれば、クリックして画像を表示できます。

カラーで撮影された画像もあります。閲覧資料の数や閲覧ページの数に制限はありません。拡大表示や画像回転などもできますが、画像データの保存、閲覧中の印刷はできません。プリントアウトが欲しい場合は、文献複写取寄せ扱いとなります。申込みから1～2日開館日内でお渡しいたします。代金はオペレータコピーと同じです。なお、複写は著作権の範囲内となります。

デジタル化資料の画像表示画面例

三田メディアセンターが所蔵する資料のデジタル化は、この他にも様々なプロジェクトが進められています。

慶應義塾は、2007年から2010年までGoogle社が進める図書館プロジェクトに参加し、著作権保護期間の終了した日本語書籍、状態の良好な和装本・漢籍、統計書、慶應関係資料などをデジタル化しました。約8万冊の蔵書がGoogle Booksで利用可能になっています。

三田メディアセンターのウェブサイトからも、慶應義塾の特色あるコレクション「デジタルで読む福澤諭吉」「高橋誠一郎浮世絵コレクション」「インキュナブラコレクション」「解体新書（アナトミア）」「特殊資料コレクション」などが提供されています。

本を手に取って見るのとは格段の差はありますが、現存する冊数が少ない本、古くて手にとって利用するのが難しい本などが何万冊も、画面を通して閲覧が可能となっています。まずは自由に利用できる、三田メディアセンターの「デジタルギャラリー」（http://project.lib.keio.ac.jp/dg_kul/index.html）や国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」（http://kindai.ndl.go.jp/）などから、ぜひ探索してお試しください。

コレクションの広場

井筒文庫

井筒文庫は、慶應義塾大学名誉教授である井筒俊彦（1914～1993）の旧蔵書コレクションです。井筒は哲学者、言語学者、イスラーム学者として知られていますが、特に「コーラン」の意味論的研究では世界的に高く評価され、いまなおイスラーム世界では最も重要なイスラーム学者の一人とされています。井筒文庫に触れる前に、井筒がどのような人物だったのか、まずは紹介してみたいと思います。

井筒俊彦は、1931年に慶應義塾大学経済学部予科に入学しました。もともと文学部志望のところを父の反対を受け経済学部を選択したようですが、結局1934年に文学部英文科に転じます。1937年に文学部の助手となり、1954年には文学部教授となりました。井筒は30数か国語を使いこなしたといわれていますが、その才能を如何なく発揮した『コーラン』の邦訳が完成したのは1958年でした。1962年から1968年までの間、それまでに積み重ねてきたイスラーム研究により、カナダのマギル大学に客員教授として赴任し、1969年には教授として迎えられています。同年、マギル大学イスラーム学研究所テヘラン支部の開設に伴いテヘランに移住したのち、1975年にはイラン王立哲学研究所教授に就任しました。しかし1979年にイラン革命が起きたため、やむなくテヘランを去り日本に帰国しました。研究の場を日本に移した後も精力的な執筆活動を行い、多数の著作を残しています。主な著作には上記の『コーラン』の翻訳のほか、『神秘哲学』や『意識と本質：精神的東洋を索（もと）めて』などがあります。

さて本題の井筒文庫ですが、この文庫には他のコレクションとは異なる特別な特徴があります。それは、故人宅（鎌倉市）に生前使用していた状態のまま保存されているという点です。いわゆる動態保存というものですが、故人宅は現在も住居として使用されているため、この文庫は研究者のみの限定公開としています。資料は、石版本90点を含むアラビア語・ペルシア語の資料が2,400冊、それ以外の資料（和漢書・洋書）が1万1千冊となっています。これらの資料の詳細は、2冊からなる「井筒俊彦文庫目録（和漢書・洋書の部／アラビア語・ペルシア語図書の部）」にまとめられています(*)。

2014年は井筒の生誕100年にあたり、これを記念して慶應義塾大学出版会より井筒俊彦全集が刊行されています（刊行継続中）。これを機に井筒を再評価する動きも高まっていますので、井筒に興味を持たれた方は、こちらをひも解いてみるのもよいかもしれません。（木下和彦）

(*)『井筒俊彦文庫目録（和漢書・洋書の部）』は、Google Booksで公開されています。
http://books.google.com/books?vid=KEIO10101684657

図書館の舞台ウラ

購入希望

利用したい資料が三田メディアセンターになかった場合には、購入希望を出すことができます。三田メディアセンターには、ほぼ毎日のように「購入希望申込」が寄せられ、その数は年間1,000件近くにものぼります。購入希望申込を受け付けたあと、私たちがどのように処理をしているのかご紹介しましょう。

購入希望を受け取ったら、まず、その資料が三田メディアセンターで所蔵していないことや発注中でないことを確認します。特に新刊書の場合は、発注したばかりでまだ届いていないこともあるので、二重に注文してしまわないよう注意します。最近では資料がウェブ上で公開されていることもあるので、そういったことについてもチェックします。確認できたら、次に、資料の内容を確認し、購入するか否かを選書基準に照らして検討します。残念ながら、希望があればどのような資料でも購入するというわけにはいきません。予算や書架スペースに限りがある中で、大学専門課程のキャンパスの図書館として、学生・教員・研究者が必要とする資料をバランス良く収集していく必要があるからです。購入することが決まったら、書店の在庫を調べて発注します。しかし、すべての資料が簡単に入手できるわけではなく、国内の書店では販売されていなかった、古い資料のため絶版・品切れであった、研究報告書や海外の学位論文といったような一般にはあまり流通しない資料であった、など様々なケースが存在します。そのような場合には、海外書店や出版元、古書市場などを探して入手します。発注した資料が無事納品されたら、検索や貸出ができるようにするために目録データを作成し、資料にはラベルなどの装備をします。これでようやく資料が利用できるようになります。購入希望者が最初に利用できるように予約をかけておくので、この時点で購入希望者にメールが送信されます。

購入希望は三田メディアセンターのウェブサイトから申込むことができます。資料の入手に時間がかかることがありますので、日数に余裕を持ってお申込みください。（選書担当）

貴重書紹介

『浦島太郎』

絵巻、1軸　［江戸時代前期］写　紙高、縦25.4糎　［132X@193@1］

石川　透（文学部教授）

『浦島太郎』のあらすじは、以下の通りである。浦島太郎は、漁師が釣り上げた亀を助ける。亀は女になり、浦島太郎を蓬莱の国へと連れて行き、幸せな日々を送らせる。やがて、浦島太郎が自宅へ戻ると、既に、700年の年月が経っていた。浦島太郎が玉手箱を開けると、一瞬にして翁になり、やがて鶴になり、亀となった乙姫と巡り会う。そして、2人ともに神社に祀られる。

『浦島太郎』は、誰もが知る日本の昔話である。しかし、上記のあらすじのように、元々の『浦島太郎』は、今日の昔話とはかなり異なっている。今日の昔話では、子供が亀をいじめているのを助け、そのお礼として亀によって、竜宮城へと連れて行かれる。しかし、中世から近世にかけて制作された絵巻や絵本では、自分が釣った亀を海に放したり、人が釣った亀を助けて放す、といった内容のものが多い。後日、その亀が若い女として現れ、一緒に舟に乗って、竜宮や蓬莱の島へと移動するのである。したがって、古い『浦島太郎』には、今日の誰もが思い浮かべる、亀の背に乗って海の中を泳ぐシーンは、少なくとも絵画にはない。だいたい、それでは呼吸ができないはずである。

古い時代から、浦島太郎が行く場所としては、竜宮というのと、蓬莱の島とに分かれる。竜宮だと、海に潜る必要があるのだが、蓬莱の島ならば、船で行けるのである。今日の絵本では、竜宮を海の中として描くのであるが、明治時代より前の絵本・絵巻では、地上の建物と変わらないように描く。本文に竜宮とあろうが、蓬莱とあろうが、描き方にはほとんど差はないのである。本絵巻では、竜宮に仕える者たちが描かれているが、御殿の前に、頭に貝や海老、蛸といった生物の姿を乗せた、顔色の悪い男たちとして描かれている。これは、今日の幼稚園のお遊戯で、頭に描かれた生物の面を載せるのと全く同じ行為である。もちろん、その生物であることを示すのであるが、これは、世界的には珍しい。このような時、海外では、頭をすっぽり覆うものを付けるか、着ぐるみを着てしまうことが多いのであるが、日本では、平安の昔から、頭にお面のように乗せることが行われていたのである。

それはともあれ、浦島太郎は、この竜宮か蓬莱の島で、3年を過ごす。これも、現代の絵本では、子供のような姿の浦島太郎が、楽しく過ごしたことだけが描かれるが、明治時代以前では、浦島太郎と乙姫が結婚する話になっている。元々の『浦島太郎』は、あくまでも、大人の話であり、3年で結婚生活が飽きてしまったかのように、実家に帰りたがるのである。そこで、乙姫は玉手箱を渡し、浦島太郎は、再び船を利用して、実家に帰る。ところが、実家が見当たらない。近くの古老に聞くと、浦島太郎は700年前に行方不明になった男だと知らせてくれる。700年前に家の近くに誰がいたかなど、知るはずがないと思うのだが、それを聞いて、浦島太郎は納得し、見てはいけないはずの玉手箱を開けてしまうのである。

今の『浦島太郎』では、玉手箱から白い煙が出てきて、浦島太郎がおじいさんになって終わってしまう。これは、見るなと言われたものを見てしまった、ということは、約束を破ったことへの罰であることになっている。しかし、これもおかしい。本来の『浦島太郎』では、この後に、浦島太郎は鶴になり、乙姫が元々の亀の姿となって再会し、鶴亀としてめでたい存在となり、最後には、2人とも神として祀られるのである。ここに至って、はじめて、めでたしめでたし、となるのである。

これらの『浦島太郎』の内容の変化は、神仏を捨てた明治時代に行われた。同じ話といえども、時代時代の違いや地域の違いは相当にある。なぜ変えられたのかを考えるのが研究なのであるが、その前に、『浦島太郎』の絵巻や絵本がどこにどれくらい存在するのかも、まだ完全には明らかにされていない。さらに異なる『浦島太郎』も存在している可能性があるのである。

慶應義塾図書館は、以前から、奈良絵本・絵巻と呼ばれる、17世紀を中心に作成された美しい絵本や絵巻を収集していることで知られていた。ところが、近年まで、『浦島太郎』や、『伊勢物語』『竹取物語』といった、著名な作品の奈良絵本・絵巻は、収集していなかったのであるが、2009年度から2013年度まで、戦略的研究基盤形成支援事業「15〜17世紀における絵入り本の世界的比較研究の基盤形成（絵入り本プロジェクト）」としての活動を通して、貴重な奈良絵本・絵巻を集め、本年度より慶應義塾図書館の蔵書とすることができた。『浦島太郎』もその中の1点である。

太郎が乙姫から歓待される場面

太郎が亀を釣りあげる場面

スタッフレポート

出島の国での日本との出会い

佐藤 康之（課長）

400年近い昔の江戸時代には、鎖国の時代があった。インターネットに世界中の情報が氾濫する現代からは想像できない時代だ。その時代にかろうじて外国の文物が流れ込んでくる小さな窓があった。1641年から1859年までオランダ貿易が行われていた出島である。ここから流れ込んだ文物を通して当時の日本では蘭学が盛んになる。慶應義塾が蘭学塾としてスタートしたことは出島と無縁ではない。一方、出島は当時の日本の文化が海外に流れ出ていく役割も担っていた。出島のオランダ商館医だったフィリップ・フォン・シーボルト（1796-1866）は、未知の国・日本の文物を約25,000点も収集してオランダへと持ち帰っていた。

ライデン大学東アジア図書館入口

ライデンはアムステルダムから電車で30分ほどの距離にあり、出島を通して流れ出た日本の文物が収蔵されているシーボルトハウスやライデン大学のある街だ。ライデン中央駅から風車小屋を眺めながら運河沿いの道を15分ほど歩くとライデン大学東アジア図書館がある。ライデン大学は公立の大学でオランダ国内最古の歴史を持ち、東アジア図書館の起源は1880年頃のシーボルトによる日本関連コレクションの寄贈にさかのぼる。現在は小ぢんまりとした図書館だが、一歩足を踏み入れるとそこがオランダであることを忘れさせる光景が広がっていた。閲覧室の書架には日本語の参考図書がずらりと並び、反対側には日本の雑誌が一面に配架されている。大型モニターの前には椅子が数脚置かれていて画面にはK-POP映像が流れていた。日本や韓国のポップカルチャーをきっかけとして東アジアに興味を持つ学生が多いとのこと。書庫には日本の学術書のほか和装本や美術書も収蔵されている。『ONE PIECE』や『火の鳥』といったコミックもあったが、学生が読むのかと思いきやポップカルチャーを専門としている研究者が使う蔵書だ。館内を案内してくれたのは日本資料専門の図書館員のナディアさん。流ちょうな日本語を話される彼女は、日本史を専攻する大学院生でもあり日本への留学も経験されている。研究テーマは江戸時代の島原藩で古文書の読解もされるという。図書館作業と研究用を兼ねたデスクの後ろにはトトロのぬいぐるみが置いてある。彼女の研究の入口にもポップカルチャーがあったという。帰国後に出会った米国の日本研究を専攻する大学院生もまた、ポップカルチャーに興味を持って選択したと語っていた。宮崎アニメやONE PIECEは世界共通らしい。日本の学生も海外で友達を作るとき、この話題で最初の一言を切り出せば会話が盛り上がるだろう。

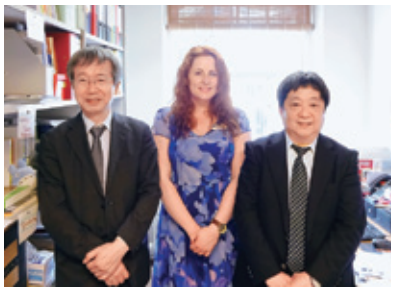
雑誌書架の様子

日本のコミックもある

シーボルトハウスはライデン大学東アジア図書館からほど近い場所に何気なく立っていた。シーボルトは帰国後、この地に居住して日本から持ち帰った収集品の大部分を一般に公開した。現在では、そのうちの約800点が公開されている。ちなみにシーボルトのコレクションはライデン大学やライデン国立民族学博物館、国立自然史博物館などにも分散収蔵されている。館内には4つの展示室があり、植物や動物の標本、漆器や木工細工、医療器具、家財道具、そのほかの生活用品まで、当時の日本を切り取ってきたかのようだ。特に目を引いたのはシーボルトが記録絵師の川原慶賀に描かせて持ち帰った植物の標本図と、間宮海峡という名称が確認できる樺太の詳細な地図だ。標本図は鮮やかな色使いで枝葉の一つ一つまで精細に描かれている。地図は、その持ち出しがシーボルト追放につながったといわれ、航空写真から書き写したように当時の樺太の河川が細かく描かれていて、幕府がこの地図の持ち出しに慌てたのも分かるような気がした。膨大な本物のコレクションを目のあたりにすると、彼の飽くなき探求心と日本を知ろうとする情熱が強烈に伝わってくる。この印象は学問を修めようとするモチベーションに繋がるように思う。

シーボルトハウス入口

短時間でのライデン訪問であったが、二つの点で有意義だったと思う。一つはオランダにおける日本研究の様子をわずかながらも知ることができたこと。海外における日本研究は中国・韓国と比較して相対的に低下していると昨今では言われるが、出島の時代から始まったオランダにおける日本研究は今でも支持を得ている、さらに嬉しいことに現代の日本文化にも興味を持ってくれる学生がいることを実感できた。もう一つはシーボルトのコレクションを通して本物が持つ魅力を再確認できたこと。シーボルトのそれとは大きく性格が異なるが、三田メディアセンターにも貴重書をはじめとするユニークなコレクションがある。これらの本物と学生が出会う機会を積極的に設けることは、資料の魅力を学生に提供することだと信じたい。出島の国・オランダは再び訪れてみたい国の一つとなった。


田村所長、ナディアさん、筆者

※2014年6月、メディアセンターが加盟するOCLC Research Library Partnershipの年次大会へ参加するために出島の国・オランダを訪問する機会を得た。

主な出来事（2014.4－2014.9）

春の文献探索ツアー “使わなければもったいないメディアセンター”

春の文献探索ツアーには、毎年多くの申込みがあります。今年も、ゼミに所属したばかりの3年生を中心に約1,000名が参加し、図書・雑誌論文の探し方、データベースの使い方、図書館の活用方法や資料の場所などを紹介しました。はじめて旧図書館に入ったひと、契約しているデータベースの数に驚いたひと、そんな皆さんから聞こえた「参加してよかった。メディアを使わなければもったいない。」という声が、スタッフの何よりの励みになっています。

今年は、文献探索ツアーの取組み方を見直しました。オリエンテーションエリアを広くリニューアルし、1コマに2グループのツアーを実施できるようにしたことで、希望の時間帯に参加していただけるようになりました。

文献探索ツアーは秋学期も開催しています。三田祭論文や卒業論文などの研究テーマが決まった時期に参加すると、みなさんの目的意識がはっきりしていて効果的なようです。他にも、パソコンを使った実習スタイルのデータベース体験講座も行っています。ゼミ単位、または友人同士でお申込みください。

館内ボードアンケートの実施について

2014年4月4日から5月10日まで、展示室前にてボードアンケートを実施しました。三田メディアセンターでは今年度、利用者ニーズワーキンググループを立ち上げ、様々な形で学生のみなさんの意見を集めることに取り組んでいます。メディアセンターに対して、どのような要望を持たれているのか把握し、改善できることは改善して、よりよいサービスを展開してゆきたいと考えています。今回のアンケートはこの活動の一環として行いました。

このアンケートでいただいた意見としては、日曜開館や平日の開館時間延長など開館時間に関する要望が一番多く寄せられました。この他にもたくさんの意見をいただきましたが、採用の可否については一つずつ検討中です。また、まだ一部ですがご指摘を受けて閉館時のアナウンスの音量調整、閲覧席の蛍光灯の定期チェックなどを行うように改善しました。今後もみなさんの目に見えるような形で三田メディアセンターに対する意見を募集したいと考えています。みなさんのご協力をお願いします。

日・EUフレンドシップウィーク「EUの交通事情」を開催

三田メディアセンターに設置されているEU情報センターでは、毎年5月9日のヨーロッパ・デー（欧州連合の誕生日）に合わせて、展示やEUクイズを中心としたイベント「日・EUフレンドシップウィーク」を開催しています。

EU情報センターとは、欧州委員会がEUに関する情報を提供するために世界各国に設置しているものです。欧州委員会出版局から寄贈を受けた豊富なEU公式資料（官報・雑誌・統計・図書等）を利用者に提供することで、EUの広報活動に努めています。

2014年のテーマは、「EUの交通事情」でした。6月9日から28日の3週間にわたり、図書館2階にてパネル展示を行い、EUの交通政策「CIVITAS」とその背景事情を紹介しました。今回の展示は、協定校である一橋大学EU情報センターと連携し、同じテーマで両機関が互いに作成した掲示物を共有し展示する初の試みでした。

EU限定ハローキティストラップなどのオリジナルグッズがもらえるEUクイズの参加者は65名でした。今から30年あまり前、フランスで誕生した世界初の社会的人権としての交通権「人間は、誰でも自由に移動する権利を有する」を発端に、「CIVITAS」の事例をはじめとしたEU諸国の環境問題への取り組みを紹介することで、ヨーロッパの街づくりへの関心を高めていただけたのではないでしょうか。

編集後記

前号（2014春号）では場所やサービスを中心にご紹介し、今回の秋号では資料にスポットライトを当てました。図書館の財産ともいうべき貴重書コレクションを年表形式でお楽しみいただき、みなさまの「知識の花弁」の一つに加えていただければ幸いです。図書館1階の展示室では、貴重な資料の数々を間近にご覧いただく機会を設けています。次回は展示室で、数百年の時を超えてみなさまにお会いできた本物から歴史の息吹を感じてください。

編集・発行　慶應義塾大学 三田メディアセンター
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
TEL 03-5427-1654　FAX 03-5484-7780
発行日　平成26年10月1日
印　刷　有限会社 梅沢印刷所
http://www.mita.lib.keio.ac.jp